

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11047

研究課題名（和文）養育者のメンタルヘルス改善を軸とした乳幼児揺さぶられ症候群予防プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the shaken baby syndrome prevention program centered on improving caregivers' mental health

研究代表者

岡本 美和子 (Okamoto, Miwako)

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授

研究者番号：70435262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、母親のメンタルヘルス改善に寄与すると考えられる新たなSBS予防プログラムを開発し、その有効性を検証することである。プログラムの内容は、「親子の相互作用」「子どもの育ちを知る」「遊び&スキンシップ」「泣き声はシグナル」「泣いた時の対処」「休息のすすめ」「パートナーのサポート」「乳幼児揺さぶられ症候群」で構成している。介入による検証の結果、SBS予防のための知識と対応に関する項目の得点が介入後に上昇していた。また、母親の気分の評価ではPOMSの「怒り-敵意」、「混乱-当惑」において有意に低値が示され、出産後早期の女性のメンタルヘルス改善に寄与することが認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における学術的意義は、既に国内で実施されているSBS予防プログラムに母親のメンタルヘルス改善に寄与する内容や子どもの泣きを識別し要求に沿った対処の仕方を含む新たなSBS予防プログラムを開発しその有効性を検証したことにある。有効性が認められたことにより、国内の両親学級、退院指導、育児学級等広く臨床現場において、出産後の生活を見通した子育て支援が可能になる点である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to develop a new SBS prevention programme that may contribute to improving mothers' mental health and to test its effectiveness. The content of the programme consists of Parent-Child Interaction, Understanding Child Development, Play & Skinship, Crying is a Signal, Coping with Crying, Rest Recommendations, Partner Support and Infant Shaken Syndrome. The results of the validation by intervention showed that scores on items related to knowledge and responses to prevent SBS increased after the intervention. In addition, the assessment of mothers' mood showed significantly lower values in POMS 'anger - hostility' and 'confusion - bewilderment', which contributed to the improvement of women's mental health in the early postpartum period.

研究分野：リプロダクティブヘルス看護学

キーワード：乳幼児揺さぶられ症候群 産褥期
メンタルヘルス 子育て支援 子どもの泣き 介入 初産婦 経産婦 産

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

乳幼児が頭部を強く激しく揺さぶられることで脳実質への損傷を負う乳幼児揺さぶられ症候群（Shaken Baby Syndrome）は、児童虐待の中でも予防可能な虐待の一つといわれている。しかし近年、国内においては年間 100 人以上の乳幼児が SBS の犠牲になっており、そのうち 10% 弱が死亡、生後 6 か月未満の乳児期前半に多いとの報告があるように未だ予防策が十分ではなく早急な対応が求められている。

SBS が予防可能であるといわれる背景には、養育者が児の泣きに関する正しい知識と対処方法を得ることで揺さぶりを引き起こすことにブレーキがかかるといわれている。その結果、これまでの本国での SBS 予防の指導教材の多くは、出産後早期の母親を対象に SBS に関する知識と子どもの泣きへの理解と対処方法についての紹介が主なものであった。しかし、先行研究によると、SBS の知識は高める効果は認められるが、子どもの泣きによる苛立ちや自身の喪失等の Frustration の軽減への効果は認められない。

最近の欧米における SBS 予防に向けた育児書等では、子どもの成長に伴う泣きへの変化とその理解のみならず、養育者を対象にメンタルヘルス対策を包含したものになっている。その一つとして、①わが子をよく観察することで深く理解しその子どもの特徴に合わせたやり取りや、②泣きの状況を識別し要求への対応が具体的に行えるようになり、子どもの成長発達支援のみならず養育者のメンタルヘルス改善に繋がること示されるようになったとの報告がある。子どもをよく観察し、理解しながら子どもとの相互作用を高められることは、養育者の Frustration 軽減や SBS 予防にとどまることなく、将来に向けての子育てにおける有効な指標になると推察できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母親のメンタルヘルス改善にも寄与すると考えられる新たな SBS 予防プログラムを開発し、その有効性を検証することである。その成果は両親学級や退院指導、育児学級等臨床現場で広く利用され、看護師が行う早期育児支援として貢献し得ると考えた。

3. 研究の方法

【調査 1】

調査 1 では「母親のメンタルヘルス」「対処方法」「子どもの泣きと特徴」を Key words に、出産後の母親を対象に子どもの泣きに直面した際の母親の気持ち、成長に伴う泣きへの対処方法、母親が実感する子どもの特徴についてインタビューを実施した。対象者は周産期に重篤な問題がなく経過した母親 10 名とし、8～12 週頃に半構造化面接を行った。その後、質的分析結果を踏まえ母親のメンタルヘルス改善にも寄与すると考えられる新たな SBS 予防プログラムで使用する小冊子を作成した。

【調査 2】

調査 2 では、新たに開発した母親のメンタルヘルスに寄与する SBS 予防プログラムの有効性を検証するため保育施設で開催される育児学級において本プログラムを取り入れた。本研究への協力に同意した母親に対し小冊子を利用しながら、子どもの様子を研究者が親と一緒に観察し特徴を捉え、さらに泣きの識別による具体的な対処方法について説明・体験による介入を実施した。介入前に実施会場にて調査への同意の得られた対象者に質問紙を配布し回答してもらい、介入後（実施後 1～2 週間頃）に事前に手渡しした質問紙に回答後郵送してもらった。質問紙では、対象者の背景、SBS に関する知識（4 段階評価）、泣きに直面した際の気持ちと対処方法（4 段

階評価)、対児への感情、養育者の気分として POMS を設定した。

介入による有効性の検証として、SBS に関する知識、泣きに直面した際の気持ちと対処方法の変化、対児感情得点及び POMS2 (Profile of mood states second edition) の各気分(「怒り-敵意」、「混乱-当惑」、「抑うつ-落ち込み」、「疲労-無気力」、「緊張-不安」、「活気-活力」、「友好」)の介入前・介入後の得点の比較には対応のある t 検定 (有意水準 5%) を行った。

(本研究は研究実施者が所属する組織の倫理審査委員会の承認を受けた後に実施した。)

4. 研究成果

【調査 1】

対象者は周産期において重篤な問題がなく通常の育児学級に参加、研究協力の同意が得られた初産婦 5 名である。インタビュー時期は、子どもの泣きがピーク期となる出産後 1 か月半から 2 ヶ月であった。調査は「母親のメンタルヘルス」「泣きへの対処方法」「泣きの特徴」を Key Word にインタビューガイドを作成、半構成的面接を実施した。分析方法は質的記述的研究的手法によりコード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行い、カテゴリー間の同質性や違いについて検討した。分析の結果、対象者全員が出産後 2~3 週間から子どもの泣きが増加し 1 ヶ月過ぎがピークであると実感、ピーク時は「悲しい」「苛立った」等情緒的動揺を経験していた。また退院後から身近に支援者がおり気持ちが楽になる、安心する経験につながる支援が得られていた。分析した結果 56 コード、20 サブカテゴリー、10 カテゴリーが抽出された。明らかになったカテゴリーは「心身の回復に伴う育児への適応感」「夫からの理解ある言葉かけ」「夫が育児の伴走者」「育児経験者からの有効な支援」「子どもの成長に伴う育児力の向上」「子どもの泣きへの理解と共感」「泣きをもたらす情緒的動揺」「情緒的動揺への対処」「自分メンテナンスのための時間」「適切な育児情報の必要性」であった。対象者全員が産後の 1 か月健診過ぎから心身の回復を実感し、その経緯には夫や実母からの理解ある支援や言葉かけがあった。また子どもの成長に伴って構築される日々の生活リズムが母親の安心感と疲労の軽減につながり、子どもの泣きやぐずりに対し当初は理解できないものであったが徐々に意味のある要求や表現であるとの理解と認識に展開していくことが明らかになった。

上記の結果を受け、各カテゴリー内容を反映する小冊子を作成した。タイトルを「産後ハピネス BOOK」とし、産後の生活への支援を目的としている。A5 サイズの全 18 ページで、「親子の相互作用」「子どもの育ちを知る」「遊び&スキンシップ」「泣き声はシグナル」「泣いた時の対処」「休息のすすめ」「パートナーのサポート」「乳幼児揺さぶられ症候群」といった構成で編集を行った。

【調査 2】

対象者は 21 名で、背景は表 1 に示したように初産婦 14 名 (66.7%)、経産婦 7 名 (33.3%)、母親の平均年齢は 30.6 (SD5.5)、産休・育休中の母親が 12 名 (57.1%) であった。育児学級での介入前と介入後における、泣きに関する知識 (4 段階評価)、泣きに直面した際の気持ちと対処方法 (4 段階評価)、対児への感情、養育者の気分を表す POMS の平均得点の比較は、表 2 に示すとおりである。

育児学級における介入前後の比較では、SBS 予防を目的とした泣きに関する知識、泣きに直面した際の気持ちと対処方法の項目においては、子どもの泣きには「なだめ難い泣きがあるもの」、子どもの泣きに耐えられないと感じた時は「安全に寝かせ側を離れてよい」が有意に高値を示した。また、母親の気分を評価する POMS では、「怒り-敵意」、「混乱-当惑」において介入後に有意に低値が認められた。有意な差は認められなかったが、「抑うつ-落ち込み」、「疲労-無気力」、

「緊張－不安」において介入後は低値を示していた。その他、「活気－活力」、「友好」においては、介入後に高値を示した。

対児感情については、愛着的感情を示す「接近的得点」、否定的感情を示す「回避得点」、愛着的感情と否定的感情の拮抗する感情を示す「拮抗指数」（回避得点/接近得点×100）で表した。その結果、有意差は認められなかったものの介入後に「接近得点」がやや上昇したことが認められた。回避得点もわずかに上昇はしたが、拮抗指数が100未満であったことから、接近得点が優先する拮抗であることが示された。

本研究における介入研究は、前後比較研究であり対象者数も少数ではあったが、出産後早期の育児期にある女性のメンタルヘルス改善、特に怒りや混乱といった frustration に少なからず寄与することが認められた。また、SBS 予防において最も知識として修得してほしい項目の赤ちゃんの泣きに耐えられないと感じた時は「安全に寝かせ側を離れてよい」について効果が認められた。

今後は、対象者数を増やす、対照群を設けての介入効果の検証を重ねるとともに、プログラムの内容のさらなる検討を考えていきたい。

表1 対象者の背景 (n=21)

項目	n (%)
初・経産	
初産	14 (66.7)
経産	7 (33.3)
就労の有無	
あり	12 (57.1)
なし（専業主婦）	9 (42.9)
家族形態	
核家族	20 (95.2)
拡大家族	1 (4.8)
身近に相談者	
あり	20 (95.2)
なし	1 (4.8)
身近に育児家事協力者	
あり	15 (71.4)
なし	6 (28.6)
児の性別	
男児	12 (57.1)
女児	9 (42.9)
	Mean(SD)
平均年齢	
母親	30.6(5.5)
父親	32.6(5.8)
介入時の日数(出産後)	88.6(25.8)
児の出生時の体重(g)	2989.1(373.6)

表2 介入前・後の比較検討 (n=21)

項目	得点 (SD)		p
	介入前	介入後	
【泣きの知識・対応】			
泣きにはピークがある	2.8 (0.7)	2.7 (0.8)	.545
なだめ難い泣きがあるもの	3.0 (0.6)	3.7 (0.4)	.003
誰にも途方に暮れることがある	2.8 (0.6)	2.8 (0.9)	1.000
長時間泣くことがある	2.6 (0.9)	2.7 (0.8)	.858
安全に寝かせ側を離れてよい	3.4 (0.8)	4.0 (0.0)	.008
泣き止まない時揺さぶってよい	1.2 (0.6)	1.0 (0.0)	.055
落ち着かせる為の工夫を試みる	3.8 (0.4)	3.8 (0.4)	1.000
揺さぶると脳に障害をきたす	3.9 (0.4)	4.0 (0.0)	.329
【POMS】(T得点)			
怒り－敵意	47.2 (7.0)	41.6 (3.0)	.006
混乱－当惑	49.6 (9.2)	44.7 (1.9)	.027
抑うつ－落ち込み	47.0 (6.8)	45.2 (5.5)	.342
疲労－無気力	47.0 (8.7)	43.0 (7.0)	.110
緊張－不安	48.6 (9.6)	43.9 (7.1)	.061
活気－活力	58.4 (8.1)	61.8 (4.3)	.118
友好	59.0 (9.9)	60.1 (9.7)	.705
【対児感情】			
接近得点	31.2 (6.7)	32.0 (7.4)	.698
回避得点	7.6 (6.0)	7.9 (5.6)	.844
拮抗指数	23.1 (17.1)	27.2(24.5)	.537

対応のある t 検定

<参考文献>

- 1) 藤原武男 (2010). 新しい乳幼児揺さぶられ症候群の予防戦略. 子どもとネグレクト, 12(1) ; 78-87.
- 2) 第2回子どもの心の診療拠点病院の整備に関する有識者会議. (2009)議事録.
(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/03/txt/s0326>)
- 3) Barr, R.G., Rivara, F.P., et al. (2009), Effectiveness of educational materials designed to change knowledge and behaviors regarding crying and shaken-baby syndrome in mothers of newborns. Pediatrics, 123; 972-980.
- 4) Karp, H. (2015), The happiest baby on the block. Bantam Books. 160-165.
- 5) Greenberg, G., Hayden, J. (2014), Be Prepared A handbook for new dad. Simon&Schuster, 45-54.
- 6) Guimarães MAP, Alves CRL, Cardoso AA, Penido MG, (2018) Clinical application of the Newborn Behavioral Observation (NBO) System to characterize the behavioral pattern of newborns at biological and social risk. J Pediatr (Rio J). 2018. 94(3):300-307.
- 7) Barlow J, Herath NI, Bartram Torrance C, (2018) The Neonatal Behavioral Assessment Scale (NBAS) and Newborn Behavioral Observations (NBO) system for supporting caregivers and improving outcomes in caregivers and their infants. Cochrane Database Syst Rev.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 津田紫緒, 岡本美和子, 矢郷哲志, 岡光基子	4. 巻 30 (2)
2. 論文標題 コロナ禍における地域の子育て支援策	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水沙弥香, 吉野英梨花, 細沼咲希, 内藤智子, 岡本美和子	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 産褥期における初産婦のスマートフォン使用に対する認識と実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東邦看護学会誌	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡本美和子
2. 発表標題 マタニティクラス・両親学級の実践に活かそう「これから子育てを行うカップルに寄り添う～出産前に“伝えたいこと”“聞いておきたかったこと”～」
3. 学会等名 第77回 日本助産師学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 M. Okamoto, E. Yoshino, S. Shimizu, S. Hosonuma, T. Naito
2. 発表標題 The relationships between the increase in infant crying at 1 month and mood state of postpartum mothers, and the mother's background in Japan
3. 学会等名 The International Confederation of Midwives (ICM), (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細沼咲希, 吉野英莉花, 清水沙弥香, 内藤智子, 岡本美和子
2. 発表標題 出産後の母親のポジティブな気分に関連する要因の探索
3. 学会等名 第50回日本看護学会 - ヘルスプロモーション - 学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡本美和子、河田聖良	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本体育大学 母子保健研究室	5. 総ページ数 18
3. 書名 産後ハピネスBOOK	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------